

# 沖縄の近現代史と教育問題\*

## － 反戦・平和教育論を中心に－

朴均燮\*\*  
kspark@knu.ac.kr

### ＜目次＞

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 1. はじめに                | 4. 1972年、ついに日本人になったのか。 |
| 2. 強制編入(1879)以後の沖縄     | 5. 沖縄と反戦・平和教育論         |
| 3. 沖縄 1945：偉大な天皇の臣民として | 6. おわりに                |

主題語: 沖縄(Okinawa)、近現代史(contemporary history)、沖縄平和祈念資料館(Okinawa Peace Museum)、平和教育(peace education)、東アジアの平和(the peace in Eastern Asia)

## 1. はじめに

三別抄の滅亡(1273)に関する既存の記録に疑問を投げ掛ける史料の中の一つとして、沖縄で発見された高麗瓦(癸酉年-高麗瓦匠造)に注目されることもある。三別抄は済州道で麗蒙連合軍により全滅したのではなく、残余勢力が沖縄に渡り、新しい居住地を作って城を建設したという主張が有力である。開京→江華島→珍島→済州道→沖縄へと繋がる綱を発見することができるという話である。沖縄で発見された高麗瓦の1273年と三別抄が滅亡した年である1273年の一致の可能性は沖縄文明の中心に三別抄があったことを示唆する。1273年はまだ三山(北山、中山、南山)王朝が形成される以前の時期で豪族が乱立した時期であった。三山の統合で琉球王国が成立したことは1429年のことだ。

13世紀以後、沖縄にはグスクという城が多く築造され始めた。この時は琉球王国の成立前であるので普通、グスク時代と呼ぶ。沖縄は14世紀、最も早い時期の大型グスク遺跡である浦添城から首里城に王城を移し、国家の姿を備えていった。沖縄のグスクの最大の特

---

\* この論文は、韓國日本近代學會の國際學術大會(2013年10月26日、沖縄國際大學)で発表されたのを修正・補完したものである。

\*\* 慶北大學校 教育學科 助教授

徴は丘陵傾斜面に沿って、非対称的に築造したという点である。このような特徴は高麗城郭でよく現れることで、開京城、江華城、珍島の龍蔵山城などがこれに属する。麗蒙連合軍の遠征の可能性を念頭に置いて高麗の石垣城郭をモデルとして沖縄も主要地域に本格的なグスクを築造して備えたと推定される。

沖縄は1609年、薩摩藩の侵攻以後、中国・日本の両属体制に編入されたとされる。沖縄は自治王国であり、明の朝貢国(1429~1609)→明・清および江戸幕府(薩摩藩)両属体制(1609~1879)→近代日本併合(1879~1945)→米軍統治(1945~1972)→日本再編入(1972~ )という帰属の変更をたどりながらアイデンティティが揺れてきた。そこで沖縄が明の朝貢国(1429~1609)であったという規定はその時代の朝鮮と琉球国の格別さを見落とすことであるので厳密な検討を要する。『朝鮮王朝実録』には、琉球国の中山王が使節を送って来朝したことを知らせる1392年の記事(『太祖実録』、太祖1年8月18日)を始めとして、琉球国に対する計865件の検索件数を確認することができる(国史編纂委員会ホームページ参照)。1458年、尚泰久王(在位：1453~1460)の命令によって鑄造されて首里城の正殿に置かれた琉球万国津梁鐘の銘文には琉球国と朝鮮の関係が特別な意味として表われている。明[以大明為輔]と日本[車以日域]より、朝鮮[鐘三韓之秀]の関係が一番最初に言及されており、ある格別さが作用していることを把握できる。

薩摩藩の侵攻以来、沖縄は中国人でも日本人でもない状態に置かれることになり、明治時代には中国人でも日本人でもない取り扱いを受け、第2次世界大戦以後にはアメリカ人でも日本人でもない無国籍状態で放置されるなど、沖縄人は常にアイデンティティ喪失の状況に置かれてきた(仲村清司、2002、2010；高良倉吉、2012)。日本の無関心と放置の中で戦争と犠牲の現場になった沖縄に対する関心と議論を通じて、東アジアの近現代史の実体を把握する必要がある。そうしてこそ沖縄を対象に、教育という美名の下で繰り広げられる昨今の虚偽意識を批判・是正して代案を模索することができる。

## 2. 強制編入(1879)以後の沖縄

1871年、琉球国宮古島の54人の漁民が漂流した末、台湾にたどり着き、原住民に殺害された事件があった。明治政府はこの事件を口実に台湾を征服し(1874)、琉球国を沖縄県として強制編入した(1879)。<sup>1)</sup> もちろん沖縄が法制度上、日本領土に編入される過程で琉球国

の自律性を維持しようとする試みが噴出した(琉球抗日復国運動)。

琉球国の自律性、自治的王権を維持しようとする試みは約20年余りにかけて王族・支配層を中心に主に清に対して請願する方式で展開した。その過程で薩摩藩侵攻以来、数百年間、蓄積された反日感情があらわれ、琉球国全体にかけた領土意識が表出されもした。琉球国の復国を大義に掲げ、自決した林世功は端的な事例である。しかし、このような抵抗も清日戦争(1894)を基点に氣勢が弱くなり始めた(高良倉吉、2012)。抵抗よりは適応を選ぶ動きと共に、伊波普猷を中心とする日琉同祖論が登場したりもした。伊波普猷は日琉同祖論によって沖縄の歴史、民俗、文学を解明する作業を継続した。伊波普猷の歴史の認識と研究成果は沖縄のアイデンティティを表わしたという評価もあるが、近代日本の皇民化政策、内部植民主義に効果的に利用された。近代日本の統治下、琉球で日琉同祖論を唱え住民の国民化に務めた伊波普猷と、朝鮮で民族改造論を提唱した文化ナショナリスト李光洙は、その履歴や言説の類似性にも関わらず、後世の思想的な評価においては、前者が近代日本の帝国主義に批判的な論者からも概ね賞賛されるのに対し、後者は親日派の代名詞として糾弾されるという大きな格差がある。このような評価の断絶の背景を理解し、それを乗り越えるための模索として、歴史的・方法論的な検討を行う必要がある(興那覇潤、2005: 237-254)。

日本は19世紀末から20世紀初めにかけて、沖縄の法制度的統合、生活文化全般の統合に拍車をかけた。その過程で沖縄の最も核心的な表象である言語を統制する方策を講じた。言語は近代国家の形成において国民作りの必須事項であった。琉球処分翌年である1880年沖縄学務部は日本語教本(『沖縄対語』)を発行し、会話伝習所を設置して日本語通訳を速成・短期過程として養成した。皇民化政策の圧力の中で本土との差別を解消し、近代化を成し遂げようとする沖縄側の焦燥感は彼ら自らが土着文化を尊重し、沖縄語を並行教育する方向ではなく、かえって自主的に抑制する方向に進んだ。これはついに方言取締令(1917)へと続いた。

1886年には小学校義務教育が始まり、1898年には徴兵制が導入された。明治政府が追求した富国強兵の中で軍事制度は核心であり、その具体的方法は徴兵制度であった。徴兵制度こそが沖縄人を日本人(皇国臣民)化する確実な方法であった。学校とともに、いや学校

1) 天皇の事実上の私兵となった帝國陸海軍は、天皇によって權威づけられ、日本陸海軍は皇軍と呼ばれた。文字通り天皇制國家の屋臺骨となったのである。その帝國日本の軍隊は明治國家成立後、7年にして臺灣に約3,500名に達する軍隊を派兵し、臺灣南部の牡丹社郷に侵略する。明治國家最初の海外派兵は臺灣出兵(1874年)と呼ばれる。臺灣側は、その出兵を牡丹社郷事件と呼ぶ(頼瀬厚、2008: 10-11)。

よりもさらに軍隊が忠君愛国のイデオロギーの注入を通した日本国民化に効果的な教育機関であったという訳である。1898年、徴兵制が導入されて以来、露日戦争(1904-05)では2000人以上の沖縄出身の兵士が出征した。

沖縄は日本に編入された後、換金作物であるサトウキビの栽培量を増やした反面、さつまいも畑や稲作は減った。1920年代中盤にまき起こった世界的な不景気のために砂糖の価格が暴落して、食べ物が不足した沖縄の農民は蘇鉄地獄を体験したりもした。1920年代中盤以後、経済難が加重され生存のために自発的に沖縄の土着文化および表象(特に言語や姓氏)を隠して消去し、本土の水準で行動し待遇を受ける日本人になろうとした。一定の主体性を強調した手段的同化の基本の意図を越えて、最も核心的な表象である言語と姓氏の放棄(隠蔽、変更)という自発的・積極的同化の道に入ったのである(이지원, 2008 : 230-234)。しかし一方では貧困から抜け出すための最初の理由であるが、徴兵忌避のために他国へ移住する人々も少なくなかった。沖縄県は移民県と呼ばれるほど、多くの人々はハワイ、北米、中南米、ブラジル、ペルー、アルゼンチン、フィリピン、太平洋の色々な島々に移民して行った。

沖縄県では日中戦争の間、標準語力行大運動と方言撲滅運動を同時に展開した。この時、柳宗悦とその一行は1939年末から1940年1月にかけて沖縄を訪問して標準語強行を批判しながら沖縄語と沖縄文化の保存を訴えた。沖縄の工芸に魅了され、民芸運動の同人と沖縄を訪問した柳宗悦は、当時標準語を重視する沖縄当局の政策が方言禁止にまでエスカレートしていく状況を見て、県当局の方針に強く反対した。柳宗悦の沖縄言語保存に関する主張は、第一に人為的に中央の言語を強要しローカルの言語を消滅させることによって、地方の文化を軽蔑する傾向を招くこと、第二には、個々の言語が一つの世界と文化を反映するにもかかわらず、言語文化のもつ価値を軽視して中央中心に行われる文化政策に対する批判であった(신나경, 2010)。しかし、柳宗悦の沖縄文化保存論は意外な反発に直面した(沖縄方言論争)。

県庁学務部は標準語普及は皇紀2600年の歴史的な盛業を成し遂げるための運動であり、沖縄出身の兵士たちの自己主張能力の向上に多いに役に立つという理由を挙げながら、外人の主張に誘惑されるな、と注文した。1940年(昭和15)を基点として皇紀2600年とは神武天皇の即位紀元2600年をいう。近代日本の学校儀礼で重視した紀元節(日本の建国記念日)はこれをいう。国防の拠点としての沖縄は戦略的に標準語の普及と同化政策が必要だという見解であった。沖縄人の忠誠心と皇国臣民らしいということは、どこまでも沖縄語の放棄を前提とするということであった。

### 3. 沖縄 1945：偉大な天皇の臣民として

東京下町大空襲から20日ほど経った1945年4月1日、米軍が沖縄本島に上陸作戦を開始した。そして6月23日に日本軍が全滅する。軍人・軍属の約12万人、一般県民の約17万人近くの死亡者が発生した。1940年当時の沖縄県の人口は57万4,579人であったから、沖縄県民のほぼ3～4人に1人が戦死した(させられた)ことになる。1945年4月1日から6月23日までの3ヶ月間続いた沖縄戦は日本が沖縄を本土防御のための一種の防壁の盾、とかげの尻尾、捨石と見做したという特徴を見い出すことができる。沖縄は第2次世界大戦の当時、日本で地上戦が広がった唯一の地域であった。日本は第2次世界大戦を起こした戦犯国家であるのに、実際には彼らの本土ではいかなる地上戦も行われたことはない。沖縄戦で米軍の爆撃(鉄の暴風、typhoon of steel)により、当時の沖縄は地獄そのままであった。さて、その地獄は米軍によるものだけではなかった。

日本の軍隊の最大の特徴である精神主義は厳格な規律と暴力によって支えられた。河野仁は第2次世界大戦当時の米日両国の元兵士への緻密なインタビュー調査を通し、戦地の兵士の思想と行動を比較文化的・戦闘社会学的観点から探究したあと、米軍を<生還>の軍隊として、日本軍を<玉砕>の軍隊として描写した(河野仁、2001)。陸軍大臣の東条英機が制定した軍人守則である戦陣訓(1941.1.)では、瓦全でない玉砕を強調した。1941年12月、日本軍國主義のシンボルでもあった東条英機内閣(1941年10月成立)の真珠湾奇襲攻撃により、太平洋戦争の火蓋は切って落とされた。このように東条英機は戦争責任者の筆頭に位置づけられ、戦後A級戦犯として絞首刑に処せられた。日本軍隊の編成には醫務隊がなかった。天皇の皇恩に完全に報いる道(集団自決、玉砕)を強調した彼らに醫務隊は必要なかった(권혁태, 2008)。あえて治療の優先順位をいうならば、それは負傷の程度でなく戦線に復帰する可能性であった。個別の軍人はこのように殺人兵器として、国家という巨大生命体のために交替可能な部品として扱われた(차옥승, 2009: 231)。1945年4～6月の沖縄で発生した集団自決事態は玉砕の軍隊を標榜した日本軍として、十分に有り得ることであった。

沖縄戦が進行される間、慶良間諸島の渡嘉敷島、座間見島、慶留間島、沖縄本島の読谷村、そして伊江島と久米島をはじめとする本島周辺の色々な島で集団自決が発生した。沖縄戦で無惨な強制集団死は最小17ヶ所から広がり、982人が亡くなった(Field, 1995; 강성현, 2006; 김윤형, 2007)。

日本の極右派・保守右翼は当時の集団死が自発的な精神の現れ、玉砕の性格を持つ集団自決だったと主張する。例えば家永三郎の教科書裁判に政府側の証人として出頭した小説家の曾野綾子は沖縄人の死を彼ら自ら選択した立派なこと(壮挙)と主張しながら自決を倫理的に美化した。それだけでなく、日本軍による住民虐殺はほとんど取るに足らず、虐殺があったとしても一部軍人の誤った判断による悲劇であると縮小した。その根拠に曾野綾子は渡嘉敷島(隊長命令否認説)と座間見島(守備隊長自決用弾薬支給拒絶説)での生存者の取材と証言を提示した(曾野綾子、1977；読売新聞、2008年11月1日)。

しかし、集団自決という言葉は共生共死を強要し、忠君愛国のイデオロギーを注入した彼らの世界観に照らしてみる時、日本軍による住民虐殺と同義語であった。実状がそうであるとしても両親の手に死んだ渾垂れ小僧の魂まで天皇のための死として記憶して感謝しようとする程、彼らは執拗である。

ひめゆり(ひめ+ゆり)は沖縄県立第一高等女学校と沖縄師範学校女子部を通称して呼ぶ言葉である。沖縄県立第一高等女学校の校誌名のおとひめ(乙姫)と沖縄師範学校女子部の校誌名しらゆり(白百合<sup>2)</sup>)から一字ずつ取って作った名前である。1941年12月8日、アジア太平洋戦争が勃発するとすぐに学生たちは軍国少女に変身した。学校では鬼畜英米を標語として掲げ、アメリカに対する敵愾心を仰いだ。1944年3月、沖縄守備軍が編成され、部隊が次から次へ沖縄各地に駐留し、学校の建物は兵営として使われた。学生たちも陣地の構築、食糧の増産事業に動員された(차옥승、2009)。

その流れと論理の中で自らを原爆の被害者として呼ぶ日本人たちは沖縄の悲劇に対して、自分たちが加害者であったことを忘却する。しかし、生命を終わらせることを自分が決めたとしても、その自らの決定にある外部の力が作用したとするなら、それは強制的な集団死に変わりはないであろう。大江健三郎は沖縄の集団自決が強要されたことを直接的に記録した(大江健三郎、1970)。その記録は愛と平和を邪魔する勢力である司馬史観<sup>3)</sup>に対

- 
- 2) 白百合は聖書に出る数多い花の中で16回も出るという。白百合は聖書の世界に最も多く使われている花である。そのため、白百合はキリスト教関連の文献や傳説の中では皆キリストを象徴している。さて、日本の女学校の發生史で校花としての白百合は明るい少女、純潔に生きて行く少女を象徴している。沖縄師範学校の校花もそうである。しかし、沖縄の少女たちに白百合のように明るく、そして純潔に生きて行く機会はなかった。戦時総動員体制の中で、戦地は男性・戦死者・負傷者、銃後は女性・遺家族という公式が作動する時代の愛国として女性にも積極的に国家のために寄与することを強要した。鬼畜英米の帝国主義が日本を侵略する激動期に沖縄の少女たちも祖国日本のための愛国の女性、大東亜共栄圏の東アジアの女性として死んでいくことであった。
- 3) 大江健三郎は日本軍の集団自決強要を直說的に記録した(大江健三郎、1970)。大江健三郎の反戦平和論は単純に政治的な批判を越えている。彼の愛はマイノリティに対する愛と繋がれている。このような総体的な愛と平和を邪魔する代表的な人物が司馬遼太郎である。司馬遼太郎は近代日本の否定

する挑戦でもあった。

## 4. 1972年、ついに日本人になったのか。

1952年4月28日、サンフランシスコ講和条約が発効されて連合国による日本占領が終わった。独立国で再出発した日本に奄美、小笠原、沖縄は含まれていなかった。講和条約第3条に規定された沖縄の法的地位は人類史で類例を探すのは難しいほどであった。沖縄の潜在主権(residual sovereignty)は日本にあったが、アメリカ軍政の統治を受ける二重従属、二重植民地化の状態に置かれていた(岩波寫真文庫・山田洋次セレクション、1958；McCormack、2003；新崎盛暉、2007)。沖縄は非常に新しいタイプの占領地であり、植民地でもあった。沖縄はアメリカの主権が及ぼす領域であったが、沖縄県民はアメリカ市民権者でもなかったし、日本国籍者でもなく、琉球国国民でもなかった。

ついにアメリカは1972年5月15日、沖縄群島と周辺の広大な海域をまるごと日本に返してくれた。140個余りの島、日本全体海域の30%以上に該当する広大な海域(約140万平方km)が日本のふところに抱かれた(岩波寫真文庫・山田洋次セレクション、1958；장효백、2011)。もう日本から沖縄に行った国際線は国内線になったし、アメリカ式で右側通行をした車両は日本式で左側通行をすることになった。

1975年7月17日、沖縄海洋博覧会を訪問した明仁夫婦がひめゆりの塔を訪ね慰霊する行為をしたそのとき、沖縄解放同盟準備会メンバーの知念功と共産主義者同盟のメンバーが火炎瓶を投擲する事件が起きた(ひめゆりの塔事件)。知念功はひめゆり学徒隊から“復讐の依頼を受けた”という事実を明らかにした。これはかつて英霊の根拠と呼んできたひめゆり学徒隊の記憶が反天皇の根拠として再生したのである。

1987年の第42回国民体育大会は冬季大会(信濃路国体)-夏季・秋期大会(海邦国体)として分

---

の歴史を肯定の歴史に変えて記述した代表的な人物である。司馬遼太郎は明治時代の近代日本を近代史の希望を見せた時代、成功歴史の時代として作り出した(司馬史観)。司馬史観では日本の行為を善と悪の構図で評価する歴史学界の観点を否定した(中塚明、2009、2010)。明治時代は世界史的に帝国主義の流行期だったことを勘案し、国家的な成長段階であったことを留意しなければならないという指摘であった。しかし、近代日本の行為を善と悪の構図で評価することは止めようという彼の史観は結局、明治時代を善の帝国として設定しつつ、近代日本の加害者としての姿を消す役割を充分にした。司馬史観の決定版としては清日戦争に対する彼の解釈を挙げることができる。司馬遼太郎の『坂の上の雲』(1968.4.22-1972.8.4)は産経新聞夕刊に連載された長篇歴史小説で、ここで清日戦争の原因と發端として特に朝鮮の地政学的な位置と朝鮮政府の無能を挙げた。

かれて開催されたが、夏季・秋期大会は沖縄で海邦国体という名前で開かれた。沖縄海邦国体は沖縄人の日の丸掲揚と君が代斉唱に対する極度の反感、そして自衛隊アレルギーを克服して国民的同化・統合を期するという政治的策略であった(權學俊、2006)。

日の丸と君が代の公式復活は日本が過去からの解放(戦争責任の回避)と過去への復帰(軍国主義の画策と蠢動)を同時に狙ったという点で問題の深刻性を感じることになる。1999年11月12日、国民祭典(<天皇陛下御即位十年をお祝いする国民祭典>、皇居前広場)で沖縄出身の歌手安室奈美恵の口に注目した者がいる。国民祭典で君が代を唱える時に安室奈美恵の口を閉じた姿がテレビに放映された。安室奈美恵が口を閉じたことに対する詳しい内幕とその内面を読みだすことは難しい。しかしその時、右翼勢力は安室奈美恵が君が代を歌わないことに対して沖縄出身なのでわざわざ歌を歌わなかったという形で攻撃した。<sup>4)</sup>

沖縄が日本に復帰(1972年5月15日)した後、今だ未解決状態である最大の課題を問うとしたら、迷わず基地問題が上げられる(沖縄タイムス、2013年5月15日)。国土面積の0.6%の沖縄県に米軍の専用施設の74%が集中している。沖縄では40年間で米軍の犯罪が8000件余り、戦闘機墜落事故だけでも40件余り起きている。日本政府は米軍基地をなくしてほしいという県民の希望を無視したまま、寧ろ墜落事故が頻繁な米軍機(V-22Osprey)を大挙配置した(中央日報日本語版、2013年5月16日)。これを<軽武装経済主義の本土>と<重武装軍事主義の沖縄>という二重構造で説明することもできる(임성모、2006)。沖縄県は米軍基地を“沖縄振興を進める上で大きな障害”と断言する。普天間飛行場問題は沖縄県の知事、議会、41の市・町・村長および議会のすべてが反対を表明した。沖縄が日本に復帰した以後、“復帰して良かった”と心から喜ぶ県民は多くない。事情がそうであっても、安倍政権は2013年4月28日、1952年4月28日に発効されたサンフランシスコ講和条約を記念する主権回

4) 攻撃の白眉は自民党の幹事長、森喜朗であった。森喜朗は2000年3月20日石川県加賀市で行われた講演で“昨年11月の天皇陛下在位10年をお祝いする国民祭典で、君が代斉唱時、沖縄出身の歌手の1人は口を開かなかった”、“恐らく君が代は知っているとは思いますが、学校で教わっていないのだ。沖縄県の教職員組合は、なんでも政府に反対、なんでも国に反対する。沖縄の2つの新聞、琉球新報と沖縄タイムスもそうだ。子どももみんなそう教わっている”と指摘した。森喜朗は沖縄出身の歌手安室奈美恵が君が代を歌うかどうか、口元を監視していたのである。これはこれまで沖縄小・中・高等学校の学校儀礼(入学式と卒業式)で見せた形態に対する本土の不都合な視線が森喜朗のやり方で表出されたのだと言える。1985年当時、文部省は学校儀礼で国旗(日の丸)と国家(君が代)の適切な取り扱いに徹底を期することを要求しながら(1985.8.28)、その履行に対する調査結果を公表した(1985.9.5)。1985年の卒業式に限り、履行の有無の全国平均[ ]は沖縄を見ると、日の丸の掲揚率は小学校92.5%[6.9%]、中学校91.2%[6.6%]、高等学校81.6%[0%]であり、君が代の斉唱率は小学校72.8%[0%]、中学校68.0%[0%]、高等学校53.3%[0%]であった(琉球新報、1985年9月11日；新崎盛暉、2005：141-142)。1985年の調査結果だけを提示したのは、その後の統計には権力者の意向を予測した地域社会の指導者(校長および教師を含む)の積極的な忠誠表現が介入したためである(新崎盛暉、2005：141-144)。



復の日の祝賀式典を執り行った。しかし、沖縄県民はこの日を屈辱の日として指定した(京都新聞、2013年3月13日社説；朝日新聞、2013年3月21日社説)。

2013年5月15日には若い研究者による琉球民族独立総合研究学会が発足した。“現在の沖縄の状況は日本による琉球差別であり、植民支配だ”という主旨文を通じて沖縄の尊厳を傷つける国家形態を糾弾しながら“日本に復帰すべきだったのか”、“自己決定権を取り戻すには独立しかないのでは……”というような意見をぶちまけた。沖縄県民の怒りこそが、日本という国家が民主主義の機能不全に陥っていることを見せる端的な事例である(琉球新報、2013年5月15日；中央日報日本語版、2013年5月16日)。

今は沖縄市になった過去のコザ市は面積の60%を米軍基地が占め、沖縄の縮小版と呼ばれた所である。コザ市の市長を16年間、四回も歴任した大山朝常が晩年に出版した本が『沖縄独立宣言』だ。副題は“ヤマトは帰るべき祖国ではなかった”である。大山朝常がスローガンのように前に出した“日本人の捨て石になってしまった琉球”、“基地の街に変わった琉球”、“ヤマトの隷属を意味する本土帰還”、“沖縄返還は第3の琉球処分”、“若者に蔓延したヤマト病”等は沖縄の日本に対する複合的な感情、葛藤の精神構造がよく表われている。日本は沖縄をアメリカに抵当として捕えられることにより、本土の平和と繁栄を享受することができた。沖縄が抱え込んだのは不信と失望であったため、そして彼らの選択は沖縄の独立であった(大山朝常、1997；朝日新聞、2010年5月16日)。しかし、日本政府が沖縄の動きに驚き、経済支援・振興計画を発表すれば、県民の鬱憤は沈静局面に入るという事実、これはある苦々しさを見せている。沖縄独立論の同義語が沖縄支援論でもあるという話である。

## 5. 沖縄と反戦・平和教育論

沖縄の近現代史を考察しながら、その関連の教育問題として沖縄戦の集団自決に関する教科書の記述、日の丸掲揚と君が代斉唱を巡る学校儀礼、そして沖縄を発信地とする平和学習・教育に関する問題を挙げることができる。ここにおいても特に平和学習・教育に関する真剣な模索が必要である。

日本の軍事化・右傾化は、会員数が凡そ1000万人に達すると言われる日本の最大の壓力團體である日本遺族會をはじめ、神社本廳のなどの絶對的な支援を得て拍車がかけられてい

る。この二つの組織を中心に日本の膨大な数に達する諸右翼組織や團體の動きも健在である。これらの組織や團體は自民黨の巨大な集票マシンともなっており、無視することはできないのである(篠瀬厚, 2008 : 30)。

沖縄平和祈念公園(糸満市の摩文仁の丘)に立てられた平和のいしじ(平和の礎、1995年6月23日に除幕)には沖縄戦による死亡者の国籍と軍民を問わず、すべての名前を刻んで入れた。平和のいしじの除幕式には戦後50年を迎えて沖縄を訪問した数百人のアメリカの退役老兵も参加した。退役老兵は過去[に互いに銃口でねらって戦った]敵軍の名前を刻んだ沖縄人の寛容と親切さに感激した。平和のいしじの除幕式に出席した当時のモンデール(W. F. Mondale)駐日アメリカ大使は記者会見の席で、戦争記念碑にアメリカ側の犠牲者の名前も刻んだ沖縄の市民にアメリカを代表して感謝すると話した(新崎盛暉, 2005 : 188-190)。

問題は沖縄住民たちをスパイ扱いしながら殺害した軍人[のような加害者]を[彼らによって]殺された[沖縄戦の犠牲]者らと区別しないで共に刻むのをどのように見るかという問題である。これは東久邇宮稔彦首相(1945.8.17-10.9)が記者会見(1945.8.26)で国民道徳の低下が敗戦の一原因だと指摘しながら持ち出した一億総懺悔論の論理に似ている(新崎盛暉, 2005 : 188-190)。<sup>5)</sup> 最大の問題は朝鮮人の犠牲者の処理問題であった。沖縄戦で犠牲になったいわゆる日本軍慰安婦や軍夫と呼ばれた朝鮮人は少なくとも数千人に達したと推定される。しかし平和のいしじに初めて名前が彫られたのは朝鮮民主主義人民共和国82人、大韓民国51人だけであった。

平和のいしじは沖縄市民社会の念願(見解)と保守勢力の欲望(戦略)が反映された象徴でもある。沖縄県平和祈念資料館の場合、1975年の開館以来、展示内容が何回も変更された。戦争記憶の再現を巡る行為主導者間の対立、葛藤の様相が端的に現れたのである。保守勢力によって日本軍の誤りを表示して批判する沖縄県平和祈念資料館の展示が反日記念館として追い込まれ、攻撃の対象となった。このような傾向ならば、日本保守政治家によって、平和祈念公園の性格も次第に靖国神社と似てくる可能性も高いと思う。これは、沖縄

5) 沖縄平和祈念公園の平和のいしじは、死の前の平等という原則の下に沖縄戦闘に連結しており、死亡した全ての被害者の名を刻んでいるということである。平和のいしじは第2次世界大戦など、日本の過去の苦難が1960年代の日本の平和及び繁栄の基礎になったという論理を反映するモニュメントであるが、これは過去の日本軍国主義の称揚に繋がった。また、国籍と関係なく死亡した者全ての名を刻むというやり方は、死亡した日本軍人のみを慰霊したかったのだが、現実の統治勢力である米軍を考慮して仕方なく米軍の犠牲者も含めるしかなかった沖縄の保守勢力の戦略的な態度とも非常に似通っている。このために、平和のいしじは沖縄内部の批判的な市民社会の意図のみならず、日本あるいは沖縄内部の保守的な勢力の欲望も同時に投射された存在になってしまった(김민환, 2013)。

での戦争の被害と犠牲、日本の加害と戦争責任は語らず状態で、浪漫化された戦争(戦争の肯定と美化、戦犯の讃美と神格化)、浪漫化された平和(文脈を問わない平和、沈黙の平和)という本當の日本的な無責任體制を意味する(김민환, 2006 ; 조성윤, 2011)。

沖縄を発信地にする平和学習・教育論の屈折した視線とその難点を言わなければならない。1950年代に入って沖縄戦で自決した女子学生部隊であるひめゆり学徒隊に関する手記やこれを素材にした映画が大きな反響を呼び起こした。ひめゆり学徒隊に対する話は映画、ドキュメンタリー、ドラマ、演劇、バレエ、歌、漫画、アニメーションまで様々なジャンルを越えて絶えず製作されてきた。またひめゆり学徒隊を賛えるために立てられたひめゆりの塔は平和学習という名の下、日本の学生たちが修学旅行のコースで多く訪れる場所の一つである(岩波寫真文庫・山田洋次セレクション、1958 : 19)。全体222人中、123人が死亡したひめゆり学徒隊の話は沖縄の犠牲を表象、再現するに至ったのである。

ひめゆり学徒隊は保守的歴史認識をする側としては逃すことのできない素材であった。ひめゆり学徒隊の全体222人中で相当数の学生は生き残ったのにも関わらず、彼らが全滅したように描き出すことによって、ひめゆり学徒隊=自決という構図を組み立てて注入した。ひめゆり学徒隊の犠牲を賛えるならば、国家のために犠牲になったと言われるすべての女性たちの話が照明を受けなければならない。しかし、そのどこにも日本軍慰安婦は反戦・平和の表象として議論されない。6) 日本が他の国と民族を侵略、支配した時期は取り上げず、戦争の末期の日本人の被害状況を中心に戦争の惨状を描写しながら反戦・平和を宣伝してきた。このように敗戦後に作られた日本の反戦映画は近代日本の加害的な行為と戦争犯罪に対しては話さずに、日本がかえって戦争の被害者だったので戦争は嫌いだという方式の平和主義を流布していることだ(신주백, 2007 ; 강태웅, 2009)。

平和学習を通じて直接体験する現場でも本土の被害表象と沖縄の交換性は強い。沖縄に

6) セーラー服の少女戦士らが登場する漫画とアニメーション『セーラームーン』の原題は『美少女戦士セーラームーン』である。『セーラームーン』の発想はひめゆり学徒隊の影響を受けたと見ることができる(Watanabe, 2001)。ひめゆり学徒隊は大衆の媒体を通じて純真無垢な少女の国家のための犠牲という軍国少女のイメージがずっと生産されてきた。制服と軍服の交換性は軍隊の論理が教育の論理を主導し支配した近代日本のイデオロギーとそのままだ(佐藤秀夫, 1987)。問題は国家のために犠牲にしたすべての女性たちの話が照明を受けたのはないということにある。ひめゆり学徒隊とは違い日本軍慰安婦に引きずられて行った少女は照明を受けられず反戦の表象として見なされなかった(Watanabe, 2001 ; 강태웅, 2009)。沖縄戦の当時、日本軍慰安所は部隊の移動により共に移動したので日本軍慰安婦に対する正確な実態の把握が難しい。当時、多くの日本軍慰安婦は日帝占領下の朝鮮から強制的に連れられてきた女性たちだった。浦崎成子(うらさきしげこ)によれば、130ヶ所余りの慰安所の中で朝鮮人女性がいたと確認された所は41ヶ所だ。しかし、これらの大部分は戦場で犠牲になったと伝えられている(新崎盛暉, 2005 : 20)。

平和学習をしに来る修学旅行が増加しており、これは戦場美談・殉国美談を聞く次元を越えて、沖縄戦の惨状を見るように学習が変わってきている(藤原幸男、2002)。しかし、広島・長崎・沖縄を単線で連結する方式の平和学習・教育論は日本の被害状況だけを確認して強調する処理方式という点で反戦と平和の本意から外れていることは明らかである。広島・長崎・沖縄を同一系列の被害の表象とする現実で沖縄の被害と犠牲を問題視して平和学習・教育論をまともに提示することは難しい。7) 沖縄の近現代史を通じて、日本の平和学習は日本の被害だけを顧みることから脱して、沖縄に対して、そして沖縄を越えて日本が被害をもたらした他の国家の都市へ平和学習に出向くという転換が必要である。もう自身が被害をこうむったので戦争は嫌いだという保守的な映像表現では真の反戦・平和にはなり得ないということを知るべきである(강태웅、2009: 1-13)。日本は沖縄問題に対して決定的な有責理由を持っているのに、沖縄と本土の対立を隠す方式、日本の沖縄に対する加害性を忘却するようにする方式の平和教育は正しくなされた平和教育になり得ない。

戦後、日本のナショナリズムは戦犯という外部を作って加害者を一部分に限定し、天皇を含んだすべてが自分自身を戦争の犠牲者・被害者として演出することによって始まった(Dower、1999)。また、沖縄の悲劇を自分のことのように悲しむ中で自身を犠牲者として作り上げた。戦前・戦中には沖縄の若者たちを死の戦争に駆り立てながらも、戦後には沖縄を彼らの必要に応じてとかげの尻尾としたのにも関わらず、今さら平和主義の発信地としようとする。あまりにも簡単に語られる平和、反省と責任が欠落した平和は真の平和ではあり得ない。それでも被害者意識の強調を通じて平和主義を掲げ、加害者意識の忘却を通じ

7) 日本において、第2次世界大戦のはじまりは広島に原爆が投下された1945年8月6日であった。広島と長崎の原爆の投下の時点で、彼らは日本が第2次世界大戦のもっと大きい被害者だと思った(Behr、1989: 538)。日本の原爆認識の大勢は、不思議にも投下国への憎しみはない。なぜであるのか。そこには、あなたの投下責任を追求しないのだから、こちらの戦争責任も加害も問わないで欲しいという甘い期待が潜んでいる(手塚千鶴子、2002: 88)。こどもや女性教師を主役にした多くのヒバクシャ・シネマには、悪いことをしていないのに、ある日突然自然災害のように原爆がふってきたという認識と、それを不平も言わず静かにうけとめる。ここには、傷ついた自己イメージが姿を見せ、国家による攻撃性の發露である戦争に参加した男達の姿も、戦争の検証にとりくむ自立した大人の姿も見えない(手塚千鶴子、2002: 83)。加害や戦争責任をめぐる沈黙の實状は広島・長崎の戦争の非展示に反映されている(千野香織、2000: 109-143)。たとえ、広島の平和祈念資料館は、原爆投下にいたる歴史的な文脈を缺く一方的被害の展示だとの批判をうけ、1994年に東館をオープンした。新たな<軍都広島>のコーナーは、近代日本史のなかで戦争に積極的に加担してきた事実を示し、また<原爆投下の理由>のコーナーも設置されたが、全體として戦争責任や加害に踏み込んだ展示にはなっていない。戦争を語るべき日本の国レベルの博物館においても、戦争の非展示として廣がっている。アジアでの戦争の被害、日本の加害、戦争責任は無論、日本の被害さえ語らず、戦中・戦後の国民生活上の労苦が母や子を中心に展示されている。このように戦争を多角的、総合的に検証する姿勢がないである(手塚千鶴子、2002: 89)。

て戦前の大東亜の夢をつないでいる日本の集団無意識はまだ続いている(차옥승, 2009 : 222)。

人の生命よりさらに大切な価値はないにもかかわらず、堂々と若者たちを死の戦場に駆り出すことを教育というならばこれは教育活動でなく犯罪行為である。加害者としての意識を忘却したまま自らを被害者として作り上げつつ、平和主義者の仮面をずっと使うならば、これは真の意味の公教育の対象としての平和学習・教育論になり得ない。いかなる論理にも人間の尊厳を冷遇し、盲目的な死をそそのかす国家は国家ではなく、これを追求する教育は教育ではない。

日本への差し迫った侵略の危険性は皆無である現実から、巨額の防衛費を計上することは純軍事的な見地からすれば不必要であり、いたずらに韓国はじめ、アジア諸国民からの懸念を抱かせるだけである。外交上はデメリットが頗る大きいのである。日本では文教予算をはじめ、財源不足から多くの予算支出項目の見直しが大膽に進められている。国立大学も法人化され、政府から大学に交付される予算が削減される一方である。そのなかにあつて、防衛費だけが削減の対象とされていない理由の一つは、過剰なまでに強行されている。米日軍事一体化路線である。日本の敗戦により、アジアの一員として平和外交を展開することによって、アジアにおける平和共同体構築の展望が見え始めた時に、日本はこれに逆行する方針を選択してしまう。それは韓国の軍事政権との癒着関係において最も典型的に示された。日本は軍事政権を支援することで、過去の植民地責任を回避しようとし、韓国を足場として再びアジア覇権の道を模索しようとしたのである(續續厚, 2008 : 32-37)。現在、日本は戦犯国家としての意識を忘却したまま、平和主義者の仮面を使いながら、公教育の場面で平和学習・教育論を無責任に話している。そんな戦略的・無反省的接近の中でアジアの平和のための教育はできないと思う。

## 6. おわりに

1980年代以来、形成されたリゾートオキナワ、長寿の島オキナワのイメージを繋いで1990年代に新しく追加された商品は沖縄という身体、すなわち沖縄の少女たちであった(本浜秀彦, 2004)。これらのイメージが沖縄のマイナスイメージ(戦争、集団自決、米軍基地、米軍の性犯罪など)と接続されないようにするために、消費者が最初からマイナスイ

メージを忘却するようにする作業は続いてきた。リゾートの島、長寿の島という沖縄のイメージもまた、引き続き流布するであろう。しかし、このような沖縄のイメージは本来のイメージだと言うには裏面の傷と苦痛があまりにも大きい。沖縄の近現代史の束縛を忘れたまま、リゾートと長寿のイメージだけ前面に掲げるならば、これはまた他の意味での暴力である。

沖縄は日本であって日本ではない。特に沖縄の乱れた時系列としての近現代史は沖縄人のアイデンティティを絶えず揺さぶってきた。近現代史の黒い軌跡は公教育の主題と指向するところを制限するであろう。なおさら反省と責任を伴った新しい教育の可能性を模索しなければならないであろう。そうできないまま、沖縄問題に対する誤った解釈と対応では沖縄を発信地とする平和学習・教育論の明るい展望であると言うには難しいであろう。加害者と被害者の区分まで揺らぐ精神構造を抱いては、いかなる教育も不可能だということ、それが教育史的な真実であり教訓である。反省のない平和は平和になり得ず、これはさらに公教育の議論の対象になり得ない。

沖縄問題は沖縄だけの問題ではない。これは帝国主義の日本の侵略と植民地支配を体験した韓国をはじめとするアジア諸国に関連した問題である。歪曲された歴史観と歴史意識の貧困という日本の政界と学界の黒いメカニズムを正すことができないならば、その磁場の中で叫ぶ、そのいかなる修辭も人生の現実を取り決められず、未来を展望できない。次のような自衛官募集の広告は沖縄の若者たちにどのような意味で近づいてくるのか気になるところである。

守りたい國がある。  
 助けたい人がいる。  
 つなぎたい未来がある。

#### 【参考文献】

- 강성현(2006)「죽음으로의 동원과 이에 대한 저항 가능성 : 오키나와 집단자결의 사례를 중심으로」『민주주의와 인권』6(1), pp.33-54
- 강태웅(2009)「일본영화 속의 반전평화 내러티브 연구 : 히메유리 학도대의 영상화와 그 표상적 의미를 중심으로」『아태연구』16(1), pp.1-30
- 강효백(2011)「일중 해양대국화는 한국 해양을 자르는 가위」『데일리안』2011년 1월 22일
- 권혁태(2008)「일본의 군대는 왜 정신주의를 강조했는가?」『프레시안』2008년 12월 9일
- 김민환(2006)「일본 군국주의와 탈맥락화된 평화 사이에서 : 오키나와평화기념공원을 통해 본 오키나와전

- 기억의 긴장 『민주주의와 인권』6(1), pp.5-32
- 김민환(2013)「오키나와평화기념공원 형성의 다른 경로: 초석론의 영향과 미군정기의 경험」『한립일본학』22, pp.125-158
- 김윤형(2007)「누가 오키나와를 기념하는가」『한겨레 21』2007년7월5일
- 신나경(2010)「로컬언어와 민족문화: 야나기 무네요시의 오키나와방언논쟁을 중심으로」『일어일문학』46, pp.417-431
- 신주백(2007)「한국근현대사와 오키나와: 상흔과 기억의 연속과 단절」『한국민족운동사연구』50, pp.291-332
- 이지원(2008)「오키나와의 아이덴티티 문제와 자문화인식」『사회와 역사』78, pp.223-276
- 임성모(2006)「잠재주권과 제일의 딜레마」『한일민족문제연구』10, pp.161-203
- 조성운(2011)「전쟁의 기억과 재현: 오키나와현립 평화기념자료관을 중심으로」『현상과 인식』35(1), pp.75-96
- 차옥승(2009)「전쟁 폭력 여성: 오키나와 전쟁의 기억」『아시아연구』12(2), pp.211-243
- 權學俊(2006)「沖繩海邦國體における國家主義と昭和天皇」『日本語文學』35, pp.485-510
- 新崎盛暉(2005)『沖繩現代史』岩波書店. 정영신·미야우치 아키오 역. 논형
- 新崎盛暉(2007)『基地の島・沖繩からの問い: 日米同盟の現在とこれから』創史社
- 岩波寫眞文庫・山田洋次セレクション(1958/2008)『沖繩: 新風土記(復刻版)』岩波書店
- 大江健三郎(1970)『沖繩ノ・ト』岩波書店. 이애숙 역. 삼천리
- 大山朝常(1997)『沖繩獨立宣言: ヤマトは帰るべき「祖国」ではなかった』現代書林
- 河野仁(2001)『<玉砕>の軍隊. <生還>の軍隊: 日米兵士が見た太平洋戦争』講談社
- 續纈厚(2008)「前後日本の政治と韓日關係: 帝國日本の解體と平和國家日本への模索」『日本學研究』24, pp.5-37
- 佐藤秀夫(1987)『學校ことはじめ事典』小學館
- 曾野綾子(1977)『ある神話の背景: 沖繩・渡嘉敷島の集団自決』角川書店
- 高良倉吉(2012)『琉球の時代: 大いなる歴史像を求めて』ちくま書房
- 千野香織(2000)「戦争と植民地の展示: ミュージアムの中の日本」. 栗原彬・小森陽一・佐藤學・吉見俊哉 編 『越境する知(一) 身體: よみがえる』東京大學出版會
- 手塚千鶴子(2002)「日米の原爆認識: 沈黙の視点からの一考察」『異文化コミュニケーション研究』14, pp.79-97
- 中塚明(2009)『司馬遼太郎の歴史観: その朝鮮観と明治榮光論を問う』高文研
- 中塚明(2010)『『坂の上の雲』の歴史認識を問う』高文研
- 仲村清司(2002)『沖繩學: ウチナーンチュ丸裸』新潮社
- 仲村清司(2010)『!ほんとうは怖い沖繩』新潮社
- 藤原幸男(2002)「平和教育と修學旅行」『琉球大學教育學部教育實踐總合センター紀要』9, pp.69-80
- 本浜秀彦(2004)「『オキナワの少女』というアイドルたち: 安室奈美恵と汎アジア的身体」『アジア遊学』66, pp.41-48
- 輿那覇潤(2005)「近代東アジア世界のなかの日琉同祖論」『次世代人文社會研究』1, pp.237-254
- 中央日報(2013)「沖繩の獨立要求する反政府デモ…韓国メディアも注目」『中央日報日本語版』2013年5月16日
- 朝日新聞(2013)「主權回復の日: 歴史の光と影に学ぶ」『朝日新聞』2013年3月21日
- 沖繩タイムス(2013)「復讐41年: 愚直に道理を訴えよう」『沖繩タイムス』2013年5月15日
- 京都新聞(2013)「主權回復の日: 沖繩の歴史を踏まえよ」『京都新聞』2013年3月13日
- 琉球新報(2013)「本土復讐41年: 自己決定權の尊重を揺るがぬ普天間閉鎖の民意」『琉球新報』2013年5月15日
- Behr, E.(1989). Hirohito: Behind the Myth. New York: Villard. 유경찬 역. 을유문화사
- Dower, J.(1999) Embracing Defeat: Japan in the wake of World War II. New York: W. W. Norton & Company. 최은석 역. 민음사

- Field, N.(1991) In the Realm of a Dying Emperor. New York : Pantheon. 박이엽 역. 창작과비평사
- McCormack, G.(2003). “Okinawa and the Structure of Dependence.” G. D. Hook and R. Siddle(eds.) Japan and Okinawa : Structure and Subjectivity. London and New York : Routledge Curzon
- Watanabe, M.(2001) “Imagery and War in Japan : 1995.” T. Fujitani, G. M. White and L. Yoneyama(eds.) Perilous Memories: The Asia-Pacific War(s). Durham, North Carolina : Duke University Press

---

논문투고일 : 2014년 03월 10일  
심사개시일 : 2014년 03월 20일  
1차 수정일 : 2014년 04월 09일  
2차 수정일 : 2014년 04월 15일  
게재확정일 : 2014년 05월 20일

---



## ＜要旨＞

### 沖縄の近現代史と教育問題

#### － 反戦・平和教育論を中心に－

近代にはいつ、沖縄は1879年日本の明治政府によって強制占領された。太平洋戦争中の1945年には、沖縄は米軍と地上戦を遂行した日本唯一の地域であった。その後、沖縄は1972年まで米軍の統治を受けることになった。1975年当時の沖縄平和祈念資料館の展示は日本帝国主義のために戦った日本軍の死を記憶する空間であった。戦争を記憶する靖国方式には日本の沖縄での戦争加害と責任に対しては沈黙している。沖縄戦の實體、そして日本軍による沖縄居住民の虐殺の實状が浮刻されたのはその後のことである。しかし日本の保守化とともに、保守派政治人たちは沖縄平和祈念資料館に対して反日本的だと規定している。このように、日本は侵略戦争の美化と植民支配の合理化を抛棄していない。沖縄の近現代史に対する日本の談論および教育の様相をみると、愛郷心と愛國心、他國に對する尊重、そして世界平和と發展を目的とする教育基本法とは合せない。沖縄に對する日本側の反省的接近を通して、沖縄の問題はもちろん、東アジアの平和は解決できる。

### A Contemporary History and Its Educational Problems of Okinawa

#### － Focused on the Discourse of Anti-war and Peace Education－

Okinawa was forcibly annexed by Meiji Japan in 1879. During the War in the Pacific, especially in 1945, Okinawa was the only part of Japan where the large-scale ground combat had been gone through. Okinawa was administered by the US military instead of Japan until 1972. The Okinawa Peace Museum was built in 1975. The first exhibition was focused to look back upon the memory of Japanese troops who died fighting for the emperor. At that time, the sacrifice of the people of Okinawa had been ignored. Later, it was started to narrate the realities of the battle field and the Japanese army's massacre the Okinawan inhabitants. This Museum had become a representative of peace education center in Japan. Since it was based on the nationalistic tendency of Japan, conservative politicians regard Okinawa Peace Museum as the Anti-Japan. Japanese historical view has certain characters such as glamorization for aggressive war and rationalization about colonial rule. The narration and education of Okinawan history are not match with their educational purpose from the fundamentals of education act as national and local patriotism, respect to other countries, peace and development of the world. It is necessary for Japan to make an apology for their mistakes. On that ground, Okinawan problems and the peace in Eastern Asia could be resolved.